

ベテルに立ち帰り祭壇を造る

創世記 35 章 1 節～15 節

2025 年 9 月 28 日

松田 基子師

私たちは、イエス・キリストを信じ、神様を信じた時、「神様は本当に生きておられる、この私を愛し見守っていてくださる」と実感しました。このように、生ける神様を実感できるということは、最高の喜びであり力です。ところが、そういう体験はいつもあるわけではありません。でもその体験があるからこそ、それ以外の平凡な日常生活が続く中でも、信仰を失わないでいるわけです。そこには、私たち以上に神様の支えがあるのですが、それは後になって実感できることです。神様と出会った喜びは大きなものです。

しかし、その信仰は次第に生ぬるいものになっていきます。神様に対する忠実さよりも、目の前の相手や周りの顔色をうかがい、周りに流されてしまうのです。又、神様を押しつけて、自我丸出しになることも珍しくありません。

そんな私たちを一番心配しておられるのは神様です。信仰者も自分の利害に頼って進めば、当然、危機に直面します。試練です。私たちは試練に遭わなければ、自分の間違い、自分の非に気付かない者です。多くの場合、試練にあって、我に返り、神様を呼び求めるのです。「**神様、助けて下さい！**」と真剣に祈ります。

何と都合の良いことでしょうか。そんな私たちであるにもかかわらず、神様は決して私たちを見捨てられることはありません。むしろ神様はその祈りを待っておられ、応答してくださいます。その時、神様が求められることは、私たちが、自己中心の生き方を悔い改め、神様に心を明け渡し、全面降伏して神様の御心に従うことです。私たち

はこういう事を何度も繰り返して、神様に聞き従うことを体得していきます。

今朝はその事を、ヤコブが歩んだ信仰の歩みを辿り、神様の私たちへの導きの確かさを受け取り、信仰の歩みを正していきましょう。

さて、ヤコブは伯父ラパンの許(もと)で訓練された 20 年を経て、神様の命令に従い、全家族、全財産を携えてメソポタミア北西部パダン・アラムから、生まれ故郷カナンの地に向かって旅を続けてきました。故郷を前に、ヤコブの最大の悔恨と不安は、兄エサウから赦しと和解を得ることができかどうかでした。

神様はそのことを御存知で、ヤボクの渡して神の使いを送り、苦悩して力の限り神様にぶつかって祝福を求めるヤコブと、真剣に取っ組み合って、彼の自我を砕かれました。

その体験はヤコブにとってペヌエル、神様の顔を見たと思える経験でした。それほどの経験をもって、兄エサウとの再会が与えられました。

兄エサウは、彼も神様から大そう祝された生活が与えられていましたので、ヤコブに対する恨みは消え去っていて、再会を喜ぶ思いでいっぱいでした。

当時、エサウはセイルを拠点に遊牧していました。セイルは死海より更に南の地で、故郷からは離れています。エサウはヤコブに、自分の所に来るように、自分が先導するからと好意を示しました。

それに対してヤコブは、内心、神様からの「**わたしはベテルの神である。生れ故郷に帰りなさい**」との命令に従うべきだと思っていました。

ですがヤコブの心に人間的な思いが湧いてきて、エサウの機嫌を損ねたくない気持ちでいっぱいになりました。ヤコブは兄との再会に、最初からご機嫌取りをして「**兄上のお顔は、わたしには**

神の御顔のように見えます」というおべっかの使
いようです。そして又々兄を欺いてセイルに行く
気は全くないのに、姑息な理由づけをして「どう
かが主人様、僕におかまいなく先にお進みくだ
さい。わたしは、ここにいる家畜や子どもたちの歩
みに合わせてゆっくり進み、セイルのご主人様の
もとへ参りましょう」と答えてしまいました。

ヤコブはヤボクの渡してこれまでに経験した
ことのない神様との結びつきを得て、神様からイ
スラエル、即ち神は支配し給うという名を与えら
れました。それなのに人間エサウに会ったとたん
に、信仰は後退して、自分の考えに陥り、元のヤ
コブの計算高い考えに支配されてしまったので
す。結果は又々兄を欺くことになりました。

兄エサウも、神様を信じ従うイサクの子です。
この時こそ、神様を第一にすべきでした。「兄さ
ん、私はあなたに対して一杯の煮物で長子の権を
奪いました。家督相続の神の祝福を横取りしまし
た。赦してください。このように罪深い私を、神
様は故郷の出発から帰還まで守り導き、家族や大
いなる財産まで与えて下さいました。私は神様が
最初に御自身を現わされたベテルに行って感謝
の祭壇を築きたいのです。私はベテルに向かいま
す」と言ったなら、エサウは喜んでヤコブを見送
ったことでしょう。

私たちも同じ過ちを犯します。神様の前と、人
の前とを使い分け、人を相手とする時は信仰が後
退してしまうのです。

ヤコブのそのような使い分けは、だんだんと信
仰の道を逸れていきます。

ヤコブはヤボク川を後にして少し進むと、緑豊
かな地が広がっていました。スコテです。家畜を
育てるのに願ってもない良い土地です。彼はここ
でしばらく家畜を飼うことにしました。自分の家
を建て、家畜の小屋を作ったというのですから、

数年を見込んでこの地に住むつもりです。下の子
どもたち、ヨセフやディナが思春期を迎えるまで、
スコテに居ただろうと推測されています。

スコテを拠点とした遊牧の期間を終えると、一
行はヨルダン川を渡りました。道を進むと、カナ
ン地方の重要な町、シケムがありました。ヤコブ
の一行は、この町の手前で宿営しました。ベテル
はシケムから二日ぐらい歩いた先にあります。で
すがヤコブにとってシケムは魅力がありました。
そこはカナン宗教の拠点ではありましたが、交易
の拠点でもありました。ここで又ひと財産、増や
せそうです。

ヤコブは早速、天幕を張った土地の一部を百ケ
シタ（1ケシタは羊一頭分の銀だそうです）、羊、
百頭分の銀で買い取りました。そしてそこに祭壇
を建てて、エル・エロヘ・イスラエル（神はイス
ラエルの神）と命名しました。ヤコブの信仰を言
い表わしていましたが、それはヤコブの考えから
築いた祭壇でした。ヤコブの頭はもう交易で財を
増やすことでいっぱいでした。

子どもたちは成長して、それぞれの思いを抱い
ていました。

娘ディナは男兄弟ばかりで、女の友達が欲しか
ったのでしょう。彼女はシケムの町に出かけて行
きました。ディナは魅力的だったようです。町の
首長ハモルの子シケムの目に留まりました。彼は
一瞬でディナの虜になり、ディナに言い寄り、引
っぱり込んで辱めました。シケムは父にディナと
の結婚を頼みました。カナンでは、そういうこと
は行われていただろうと推測されています。

父ハモルが息子の結婚申し入れをヤコブに頼
みに行った時、ヤコブの息子たちが丁度遊牧から
帰って来ました。兄たちはすぐに事の次第を聞く
ことになりました。兄たちは妹が辱められた事に
大変な憤りを覚えました。

ハモルは兄たちの反応に、自分たちとの違いを感じたのですが、ヤコブの一族と姻戚関係を結ぶ利点を考えて、兄たちをなだめ、「互いに姻戚関係を結びましょう。ここに移り住んで自由に使ってください」と頼み込みました。シケムはシケムで、「どんな高い結納金でも贈り物でもお望み通りに差し上げます」とディナと結婚したい一心で懇願しました。

それに対して兄たちは、「割礼を受けていない男に妹を妻として与えることはできません。但し、あなたたちも割礼を受けるなら、互いに姻戚関係を結んでも良いでしょう」と答えました。

ヤコブ一族にとって、割礼は神様との関係を表すものです。息子たちはそれを神様抜きで、自分たちの計画遂行のための手段としたのです。

ハモルとシケムは、割礼は別の意味で周辺国でも行われていたので、町の人々を説得しました。「ヤコブ一族は良い人たちで、多くの財産を持っている。ここに住んでもらって自由に取引をしてもらい、互いに姻戚関係を結んでうまくやっこう。そのためには、先方は割礼を望んでいる。だから皆、割礼を受けよう」と呼び掛けました。

町の男性は同意して割礼を受けました。割礼は3日目に一番痛みを感じて、思うように動けなくなるのだそうです。ディナと母を同じくする兄シメオンとレビは、その時を狙って町の男性を剣にかけ、他の兄弟たちは町の家畜を略奪し、女性と子供を奴隷とするという暴挙に出ました。

ヤコブは事の重大さを悟りました。周辺住民が黙っている訳がありません。ヤコブ一族がいくら栄えたとは言え、対抗できる相手ではありません。一族が減ぼされる危機に直面しました。

途方にくれているヤコブに神様は御声をかけられました。

「さあ、ベテルに上り、そこに住みなさい。そ

してその地に、あなたが兄エサウを避けて逃げて行ったとき、あなたに現れた神のための祭壇を造りなさい」(35章1節)と言われました。

ヤコブはヤボクの渡しで、自分の全身全霊を献げ切って、神様に会おう経験をしたのですが、現実の生活に戻ると、神様の御心に従うことを第一とせず、「これくらいは許されるだろう、先ずはこれを済ませてから」と、現実を優先させている内に、神様への信仰は薄れてしまったのでした。

そんなヤコブや私たちが本心に立ち返るのは、試練に遇って、神様以外に頼るところが無くなった時です。ヤコブは全員に命の危険が迫った時、自分の不信仰を示され、一族全員が神様の前に悔い改めなければならないことを悟りました。

ヤコブは、自分が一族の長としての信仰の責任を強く感じました。今まで自分一人の信仰で、周りの者に対して曖昧であった態度を悔い改め、家族及び一緒にいるすべての人々に、神様を礼拝する備えをさせて、ベテルに行くことを決意しました。そして

「わたしはその地に、苦難の時わたしに答え、旅の間わたしと共にいてくださった神のために祭壇を造る」(35章3節)との決意を伝えました。

家族と僕たちは皆、家長ヤコブの真剣さが分かり、自分たちも従いました。持っていた神々やお守りであった耳飾りをヤコブに渡すと、ヤコブはそれらをシケムの近くにある榎の木の下に埋めたのでした。それは一族皆が揃って神様に仕える告白でした。

一方、周囲の町々はヤコブ一族に対して大変な怒りに燃え、シケムの町のための報復に結集しようとしたのですが、神様は周囲の町々に恐れを抱かせられたので、ヤコブの一行は無事にシケムを離れることができました。

ヤコブはやっと一族揃って、彼が神様に初めて

出会ったベテル、即ち神の家、天の門に辿り着きました。そこに祭壇を築いて、エサウを避けて故郷を離れた時、自分に現れ、必ず守り連れ帰ると約束し、それを守ってくださった神様に、心からなる感謝をささげました。

神様はヤコブに

「あなたの名はヤコブである。しかしあなたの名はもはやヤコブと呼ばれない。イスラエルがあなたの名となる」(35 章 10 節)と言われました。

ヤボクの渡して必死に神様にしがみついて、神様からイスラエルの名を与えられたにもかかわらず、現実に向き合うとヤコブに逆戻りをしてしまったのですが、神様はそんなヤコブから、イスラエルの名を取り上げることなく、**「あなたはイスラエル（神は支配し給う）なのだよ、もはやヤコブと呼ばれず、イスラエルと呼ばれる」**と確証をお与えになりました。そして、アブラハム、イサクに与えられた、祝福の約束の更新をしてくださいました。

子孫の繁栄から、国民を成す発展へ、そして土地を与えるとの約束でした。多くの民と土地が与えられるということは、決して人間本位に好きにして良いということではありません。その使命は神様の御業と栄光を表すことです。その地に住む者が、神様を畏れ敬い、誰をも尊び愛し、自然を大切に、神様の御心を広げていくことです。その使命を果たさなければ、神様は戒められるでしょう。

さて、私たちもヤコブと同じで、神様への信仰よりも、現実に流されてしまう者です。神様はそんな私たちをヤコブ同様、決してお見捨てになることはありません。見捨てるどころか、滅びて当然の私たちを救うために、御子イエス・キリストを遣わし、御子の十字架の贖いによって私たちを救い、命の道に導いてくださいました。私たちは

神様から最高の祝福を受けています。

私たちにとって、このイエス・キリストの救いを受けたところが私のベテルです。信仰の原点です。その時、神様に自分の存在を委ね、神様が支配してくださる者へと変えられたのでした。

しかし、現実の生活に戻ると、信仰が後退する生き方をしてきました。神様はその度に**「あなたのベテルに立ち帰って祭壇を造りなさい。つまり礼拝をしなさい。悔い改めて新しい力を得て出て行きなさい」**と御声を掛け続けてくださっているのです。

罪と誘惑に満ちた地上の旅路を歩み抜いていくためには、週毎に魂のベテルで礼拝をささげていくことが信仰を持ち続けていくために必須の事です。

これは神様の愛の招きです。私たちも聖日毎に魂のベテルに立ち帰って、神様に礼拝をささげ、信仰を強められて、使命を果たすことを求め、御国を目指して地上の旅路を歩み抜いて参りましょう。

お祈り致します。

天の父なる神様。私たちは神様からイエス・キリストの御救いを頂きながら御心に服さず、ヤコブ同様、直に自分の思いに生きて失敗を繰り返している者です。

こんな私たちを尚も愛し**「あなたのベテルに立ち帰り、祭壇を造りなさい」**と呼びかけ、命の道に引き戻して下さり、ありがとうございます。

週毎に魂のベテルに立ち帰り、礼拝をささげて命の道を歩み通す者とならせてください。

救い主イエス・キリストの御名を通してお祈り致します。 アーメン。